

# チヨースーの話法の意味論(2) —地の文の現在時制:Tr 5.176-96—

中尾 佳行\*

The Semantics of Chaucer's Speech Representation (2):  
The Present Tense in the Narrative Parts: *Troilus and Criseyde* 5.176-96

Yoshiyuki NAKAO\*

## ABSTRACT

This paper is a pilot study to investigate the multifunctions of the present tense in the narrative parts of *Troilus and Criseyde*. Since a narrative story is written about the past events its characters have experienced, it is natural that they should be described in the past tense, particularly so in the narrative parts. Why does Chaucer switch from the past tense to the present in the narrative parts? I applied to my research the narrative semantics of tense by Fleischman (1990). There are four-layered semantic structures (referential, textual, expressive and metalinguistic). I focused on an example (Tr.5.176-96), where Criseyde was sent to the Greek camp via prisoner exchange and was lovingly addressed on the way by Diomedes, a Greek knight and then was welcomed by Calchas, her father. Criseyde's response to Diomedes was described in the present tense through Narrator's Report of an Act/Narrator's Report of a Speech Act although her sorrow due to her departure from Troilus was described in the past tense. Through the function of the present tense ("timeless") it was found that an ambiguity was likely to arise between Criseyde's politeness to Diomedes as belonging to a courtly lady and to her more positive attitude towards him.

キーワード：『トロイラスとクリセイデ』、話法、時制、現在形、前景化、  
真実性、視点

## 1. はじめに

チヨースーの話法は従来そのヴァリエーションやそれぞれを同定する言語指標に重点が置かれ、その意味論的な問題については、十分に考察されてこなかった。中尾(2018)及び Nakao(2018)は、『トロイラスとクリセイデ』(*Troilus and Criseyde*, 1385)を取り上げ、話法のタイプによりその構成言語がいかに関与付けられていくか、そのプロセスを記述・説明した。本稿では、『トロイラスとクリセイデ』の話法において、語り手の地の文に着目し、語り手の現在時制の意味機能を考察する。語り(物語)は、主として登場人物の過去の経験を再現し、

---

\*大学教育センター教授

過去時制が無標である。従って、語り手による地の文は、基本的に過去形で叙述される。しかし、場面に応じて現在時制に変更され、それは有標的に価値付けられる。他方、直接話法 (Direct Speech) は登場人物のリアルタイムでの会話で、現在時制が無標、逆に過去時制は有標的である。地の文の現在時制は、直接話法に比し、その有標さ故に詩人の詩的技法の一端が垣間見られ、注目すべき表現項目である。

これまでチョーサーの時制は主として文法論の立場から論じられ (Kerkhof 1982)、意味論的な立場からは殆ど研究されていない。談話構成と語用論の立場からの見直しがやっと始まった程度である (中安 2013)。言語学が開拓した談話構成と語用論は、文学テキストにおいては語り論 (ナラトロジー)、特に話法と表裏の関係にあるが、この点からの時制の考察は更になされていない。本論では『トロイラスとクリセイデ』の地の文の現在時制に焦点を当て、一つの事例研究を行う。

## 2. 先行研究と研究課題

### 2.1. 先行研究

チョーサーの時制は、話法と密接な関係があるにも拘わらず、その考察は十分に行われていない。Kerkhof (1980)は文法的な記述に留まり、談話構造及び語用論に広げた中安 (2013)も、話法の観点を取込んでいない。Fludernik (1993, 1996)は語り論の立場からチョーサーの話法を取り上げたが、時制に対する体系立った記述はない。Moore (2015)はチョーサーの直接話法を同定する言語指標を調査したが、語り手の叙述 (人物の言動を語り手がどの程度にコントロールし、編集しているか) は直接考察の対象とはせず、時制の問題には十分に注意を払わなかった。この点、Fleischman (1990)は、話法と時制の問題を意味論的に関係付け、注目に値する。しかし現在までのところ検証はフランス文学に限定されている。本論ではこの方法論を援用し、『トロイラスとクリセイデ』を例に、地の文の現在時制を再考する。

### 2.2. 研究課題

『トロイラスとクリセイデ』において、地の文の現在時制はどのようにまた何故意味付けられるのか、そのプロセスを記述・説明する。

## 3. 方法論

本研究課題は Fleischman (1990)を援用して追究する。彼女は語り (物語) の時制を4つの意味層に分けている。第一の意味層は「指示機能」(Referential function)、第二の意味層は「テキスト機能」(Textual function)、第三の意味層は「表現機能」(Expressive function)、そして第四の意味層は「メタ言語的機能」(Metalinguistic function)である。それぞれは、相互に密接に関わりながら、循環的に機能している。現在時制であれ過去時制であれ、この4層を通して意味付けられていく。図1のように重層的に機能する。

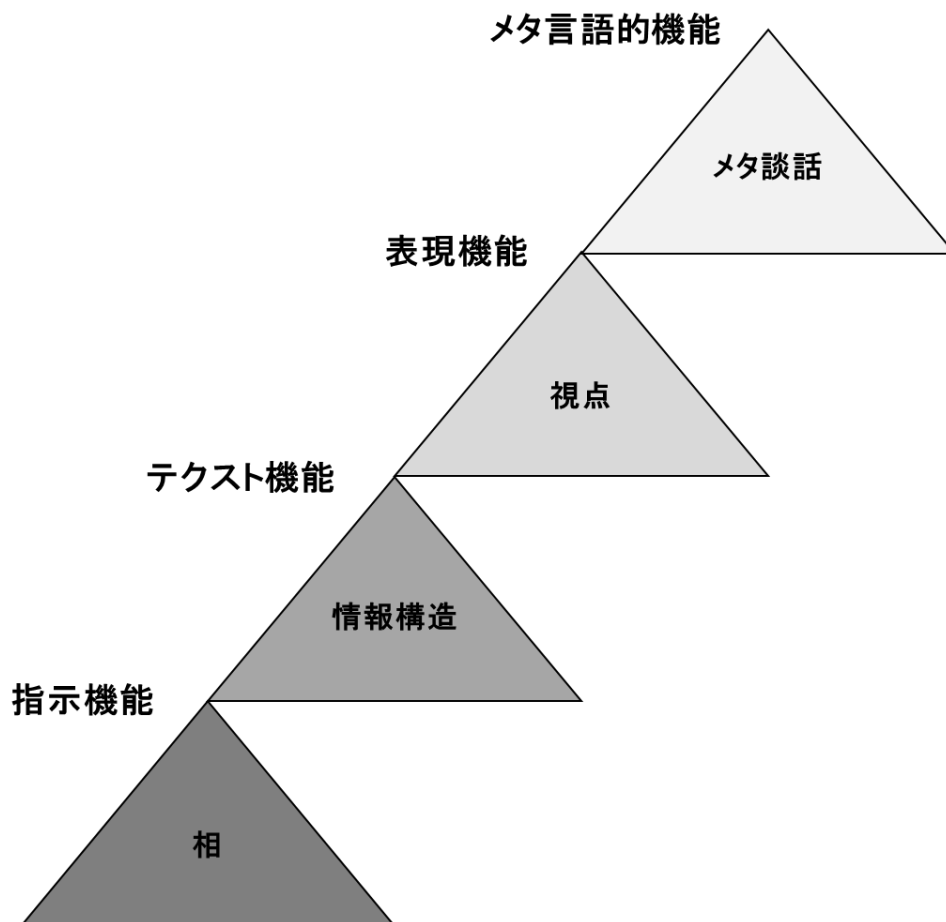


図 1：時制の意味論

第一の意味層「指示機能」は、動詞に内在的な機能で、大きく時制、相、モダリティ（事態に対する話者の判断・評価）からなる。時制は現在形と過去形に二分される。（英語では未来時は一定の型を持たず、未来表現として見なされる。）現在形は現在時と関係するものの、瞬時的動作、習慣的動作、不変の真理、歴史的現在（過去の経験を劇的に現在形で再現すること）等をカバーする。その中核的意味は「時間の超越」(timeless)である。他方、過去形は過去の出来事、過去の状態、過去の習慣動作等を表し、その中核的意味は「遠隔性」（現在との物理的・心理的な隔たり）と「特定性」（出来事が生じた特定過去時）からなる（吉良 2018: 102-07）。

動詞の相は、Vendler (1967)<sup>1</sup>によれば、大きく状態動詞 (state verbs) と動作動詞 (dynamic verbs) に二分される。動作に完了点 (endpoint) があるか否かが重要で、それによって動詞は下位区分される。状態動詞は継続的で完了点はない。動作動詞は動作の完了点 (endpoint) の有無で、更に二分される。完了点のない活動動詞 (activity verbs) と完了点のある達成動詞 (accomplishment verbs) 及び到達動詞 (achievement verbs)。活動動詞は永遠に活動状態が続き、明確な完了点を持たない。完了点のある達成動詞と到達動詞は、その仕方で異なる。達成動詞は段階的（始め、中間、終わり）に完了点に達するが、到達動詞は（瞬間動作であれ一定の時間のかかる動作であれ）最後の瞬間（完了点）に焦点が置かれる。

但し、ここで注意すべきは、相は動詞とその補部を含めた状況（文）で再定義されることである。“He drinks”の drinks は活動動詞で明確な完了点はないが、“He drinks a pint of beer.” と言えば、無限の行為ではなく「1パイントのビール」で一定の完了点がある。しかし、現在形では習慣的動作としても解され、完了点は依然として不明である。“He drank a pint of beer.”

の過去形では、過去の習慣動作として現在より隔てられ、点的に再定義、あるいは過去の一過性の行為として認識され、明確に完了点が与えられる。

モダリティは、時制文とモーダル文の分岐点にある。時制文は話者が100%真実であると見立て客観的に表し、モーダル文は話者の判断・評価が入り、真偽の判断を保留する。後者は動詞の屈折形態素を通して表す仮定法と法助動詞と共に表す分析的な方法（法動詞＋動詞）がある。仮定法は事象を仮想上のこととして表し、法助動詞は、根源的モダリティとしては意志、義務、能力等を表し、認識的モダリティとしては種々の確定性の度合い（～するかもしれない、～に違いない、～でありうる等）を表す。

第二の意味層「テキスト（談話）機能」は、文単位を越えた範囲をカバーし、情報の際立ち度を問題にする。過去形から現在形へ、またその逆の交代は聴衆・読者の注意を喚起する。人物の過去の経験を再現する語りでは、情報が過去形で叙述されれば通例無標・背景化、現在形では有標・前景化する。またストーリーの転換点に現れるかどうか情報の際立ちに影響する。情報の際立ちは、現在時制自体と言うよりは、過去形との交代、ストーリーの転換点が鍵を握っている。しかし、チャーターでは語り手の口承的なパフォーマンスを聴衆が聞き、理解する一方、写本の書き言葉を読者が読み、理解することも可能であった。前者ではI-mode的な認知方法<sup>2</sup>が強く働き、パフォーマーは事態を聴衆と臨場的に共有し合い、たとえ過去の経験でも現在形で再現され易い。直接話法でのやりとりに近い。他方、後者ではD-mode的な認知方法<sup>3</sup>が強く働き、書き言葉を通して語り手と読者との間に距離が置かれ、過去の経験の現在時への切り替えは、一層際立って甦ってくる。近代小説での歴史的現在（historical present）は、この効果を狙ったものである。チャーターは口承と書き言葉の微妙な境界線に立っている。

第三の意味層「表現機能」は、出来事の因果関係と表裏の関係にあり、人物がそれをどのように判断・評価するか、彼らの視点が問われる。第一の意味層で見た動詞の相（完了点があるか否か）やモーダル文（話者の判断・評価）、また第二の意味層「テキスト機能」（情報の前景化・背景化）にも視点は含められるが、ここでは視点をより意識的、丁寧に見ていくことにする。現在形になると、人物の内部からの言説として捉えられ易い。現在形はそのように聴衆にサインを送ることである。過去形が結果を示すのを得意とすれば、現在形はそれとは逆で考えているプロセスを示すのが得意である。このような特徴は直接話法に端的に現れ、話者が明確であり、視点はすぐにも限定される。地の文での現在形はもっと微妙である。中世における真実性の問題<sup>4</sup>に密接に関わる。コンテンツに真実性がある（聖書の教え、金言等）と見立てると、一般的で誰が言おうが構わない<sup>5</sup>。語り手はパフォーマンスにおいて聴衆と視点を共有しようとしている。他方、本作品では、生身の人間としての心理や意識が深く掘り下げられ、個性的な思考・感情が追究されてもいる。視点の分化が行われているのも事実である。過去形について言えば、地の文の中に人物の視点が投影される話法、自由間接思考（Free Indirect Thought）や自由間接話法（Free Indirect Speech）も見られ、語り手の中立的な視点か、それとも人物の個別的な視点なのか、揺らぎが生じている（中尾 2018、Nakao 2018 参照）。

第四の意味層「メタ言語的機能」は、基本的には語り手が物語世界の外にいて、語りの内容ではなく、その進め方を聴衆に示すメタ談話（metadiscourse）、及び言語の使い方そのものについてのコメントである。この機能は「時間の超越」の叙述で現在形の特許である。この現在形の特徴は、上述した真実性の問題に関わり、価値の共有性・一般性はメタ言語的な特性を生かしたのものである。

上述の4つの意味層は独立的・遊離的ではなく、循環的に機能している。どの一つを取り上げても4つの中の一部である。このことを念頭に置き、以下では、地の文の現在形を第一の意味層から第四の意味層まで順次記述・説明する。例証として Tr 5.176-96 を取り上げた。

#### 4. 事例研究

『トロイラスとクリセイデ』は全5巻からなる。その内容は概略次の通りである。第1巻においてトロイの王子トロイラス (Troilus) は恋するものを馬鹿にしていたが、寡婦で喪に服している宮廷貴婦人クリセイデ (Criseyde) を見て一目惚れする。友人のパンダラス (Pandarus) に恋を打ち明ける。パンダラスはクリセイデの叔父でもあり、トロイラスの愛を叶えてやろうと戦略をねる。第2巻において、パンダラスはトロイラスの愛を伝えるために、クリセイデの館にやってくる。彼女は宮廷貴婦人としてそのことを無節操に受け入れることはできず、躊躇する。その折トロイラスが凱旋して彼女の館の眼下を通り過ぎる。それを見たクリセイデはトロイラスの勇武に引かれていく。第3巻において、パンダラスはクリセイデを自分の家での食事に、嵐が起こると予測した日に招待する。彼女に知らされないままに、トロイラスは予めパンダラスの家で待機している。クリセイデは食事の後、嵐のために家に帰ることはできず、パンダラスの家に泊まる。そこにトロイラスが現れて、彼女は当惑するものの、二人は愛のクライマックスを遂げる。しかし第4巻でトロイとギリシャ間の捕虜交換が提案される。クリセイデはギリシャ側の捕虜になっていたトロイの騎士、アンティノール (Antenor) と交換され (彼は後にトロイを裏切り、トロイ崩壊を導く)、ギリシャ側に行くことが決定される (神官であった彼女の父親カルカス (Calkas) はトロイが滅亡すると予言し、逸早くギリシャ側に亡命していた。この捕虜交換は父親のたつての願いであった。)。トロイラスは彼女と駆け落ちすることを提案する、しかし、彼女はギリシャ側にまず行き、10日目に必ずトロイに帰る、と彼を説得する。第5巻において、捕虜交換が行われ、クリセイデはギリシャ側に送られる。ギリシャ側の武将ディオメーデ (Diomedes) はクリセイデに執拗に求愛する。彼女は遂に彼に屈し、結果トロイラスを裏切ることになる。二人の愛の破局である (中尾 2018: 33 を参照)。

第5巻において、捕虜交換が実行され、クリセイデはトロイラスと別れ、ディオメーデのエスコートで、ギリシャ側にいる父のもとへ送られる。途中、ディオメーデは騎士として彼女に奉仕すると、多弁的に言い寄る。たとえ彼女を口説き落とせなくとも、言葉を失うだけだ、と。

(1) Criseyde unto that purpos lite answerde,  
 As she that was with sorwe oppressed so  
 That, in effect, she naught his tales herde  
 But here and ther, now here a word or two.  
 Hire thoughte hire sorwful herte brast a-two,  
 For whan she gan hire fader fer espie  
 Wel neigh down of hire hors she gan to sye.

But natheles she thonketh Diomedes  
 Of al his travaile and his goode cheere,  
 And that hym list his frendshipe hire to bede;  
 And she accepteth it in good manere,  
 And wol do fayn that is hym lief and dere,  
 And tristen hym she wolde, and wel she myghte,  
 As seyde she; and from hire hors sh'alighte.

Hire fader hath hire in his armes nome,  
 And twenty tyme he kiste his doughter sweete,

And seyde, “O deere daughter myn, welcome!”  
 She seyde ek she was fayn with hym to mete,  
 And stood forth muwet, milde, and mansuete.  
 But here I leve hire with hire fader dwelle,  
 And forth I wol of Troilus yow telle. Tr 5.176-96

(チャーサーのテキスト及び作品名の略記は Benson 1987 に拠る。)

(1)の第1連では、人物の過去の経験の再現、無標の過去形が使われている。彼女はトロイラスと別れてひどく悲しみ、ディオメーデの言葉一つ、二つを除けば耳に入らなかった（ようだ）、と表される。第2連では、地の文にも拘わらず、現在形に切り替えられる。クリセイデは、彼の親切と友情に感謝し、またその善意を受け入れる、と表される。話法のタイプは語り手が人物の言葉をコントロールし、編集した、語り手の発話行為報告・語り手の行為報告<sup>6</sup> (Narrator’s Report of a Speech Act/Narrator’s Report of an Act) が選択されている。しかし、この連の最後で彼女がディオメーデを「信頼したい、またそうできる」と発話をより忠実に再現する時には、間接話法 (Indirect Speech) に移行、現在から隔てられ、過去形に戻る。第3連は父親に会う場面で、また現在形で始められる。連の最初の現在形は、場面転換のマーカでもある。トロイラスと別れた悲しみの場面から (過去形) クリセイデによるディオメーデの申し出へのレスポンス (現在形→過去形)、そしてその感謝の場面から父親に会い安堵する場面へ転換 (現在形)。娘を歓迎する父親の言葉は直接話法でハイライトされる。と思うやクリセイデの心の落ち着きの描写は、また過去形に戻る。

#### 4.1. 第一の意味層「指示機能」 (Referential function)

(1)の第1連で、トロイラスとの愛の経験は、過去のこととして描き出される。彼のライバル、ディオメーデを前にして、過去形で遠隔的に描かれる。状態動詞 (was with sorwe oppressed Tr 5.177) は過去形で、現在から隔てられた一過性のこととして再定義される。この叙述の母型文“as she that” (Tr 5.177)は、“as”の解釈が微妙で、彼女の本当の悲しみなのか (「——ので」)、それとも見かけ (「——のように」) なのか、曖昧な読みを許す (Nakao 1993, 1995, 2012 を参照)。(彼女の悲しみの心が)「破裂する」(brast Tr 5.180)は到達動詞であるが、上位節の「思えた」(thoughte Tr 5.180)で、その真実性はトーンダウン。父を見て「馬から落ちた」(gan to sye)のganを“begin”を表す相的な意味で取れば、完了点のある到達動詞である。しかし、これも「殆どそうであった」(neigh Tr 5.182)とトーンダウン。クリセイデの混乱・狼狽は微妙にカムフラージュされている。

反面、(1)の第2連、ディオメーデとの関係は、現在時制を通して、今そして未来に開かれて描き出される。

(2) But natheles she thonketh Diomedede  
 Of al his travaile and his goode cheere,  
 And that hym list his frendshipe hire to bede;  
 And she accepteth it in good manere,  
 And wol do fayn that is hym lief and dere, Tr 5.183-87

動詞の相は完了点のある到達動詞 (thonketh Tr. 5.183, accepteth Tr 5.186) で、完了点のない状態動詞や活動動詞よりは、一層際立てられる。しかし、この完了点は、現在形で表されることから、その中核的意味、「時間の超越」が機能し、再定義される可能性がある。習慣的、不変の行為として、つまり、クリセイデのディオメーデへの反応は、彼女の個性というよりは、宮廷貴婦人の礼儀作法として解される可能性がある。話法は、語り手の発話行為報告・

語り手の行為報告 (NRSA/NRA) が選択されている。語り手は礼儀作法として聴衆に客体化しようとしているのか。宮廷貴婦人の中核的資質は、相手の親切や献身を無碍に否定できない憐みの情である。(3)はパンダラスがトロイラスにクリセイデは高德であるが故に憐憫の情があると説き、(4)は語り手が彼女の憐憫の情の豊かさ、柔らかい心、それ故の心の流動性を浮かび上がらせる。

(3) “And also thynk, and therewith glade the,  
That sith thy lady vertuous is al,  
So foloweth it that there is some pitee  
Amonges alle thise other in general; Tr 1.897-900

(4) Ne nevere mo ne lakked hire pite;  
Tendre-herted, slydyng of corage; Tr 5.824-25

しかしクリセイデのディオメーデへのリスポンスは、相的な意味と同時に動詞の意味そのものにも注意すべきである。彼女の受け入れの態度は徐々に積極的になっていくように描かれている。thonketh から accepteth へと。更に注意すべきは、時制文からモーダル文への移行である。彼が好ましく思うことを喜んでほしい、と、モーダル文が使用され、彼女の内面の動きが映し出される (wol do fayn that is hym lief and dere Tr 5.187)。wol が意志を表すなら、クリセイデは更に積極的になる (5.3「表現機能」参照)。この連の行頭の等位接続詞 And の繰り返しは、彼女がディオメーデを受け入れる根拠を次々と探し出しているようでもある。

彼女がディオメーデを「信頼する」では更に彼女の態度は積極的に、活動動詞で完了点がなく持続する。モーダル文が持続し、「そうしたい」(she wolde)、「そう上手にできる」(wel she myghte)と。

(5) And tristen hym she wolde, and wel she myghte,  
As seyde she; and from hire hors sh'alighte. Tr 5.188-89

ここでの話法の転換は注意を要する。一般論としても読み取られる場合、語り手が強く介入した話法、しかも現在形で、他方、より人物の個性が表れる場合は、間接話法、過去形で表され、現在から隔てられている。しかし、間接話法では、seyde she と、話者クリセイデがクローズアップされる。seyde は到達動詞で、話した瞬間にその行為が終了する。

#### 4.2. 第二の意味層「テキスト機能」 (Textual function)

第一の意味層「指示機能」対し、第二の意味層「テキスト機能」の観点加味され、現在形の意義付けは厚みを増していく。「テキスト機能」は、文単位を超えた談話的な連続性であり、情報の目立ち度が問われる<sup>7</sup>。つまり、その情報は背景化されるのか、それとも前景化されるのか。語りは、過去形が無標で、情報は背景化、反面、現在形は有標で、情報は前景化する。時制の交替により情報の相対化が行われる。トロイにいるトロイラスと別れた悲しみは、(1)の第1連で、過去形で表される。

(6) As she that was with sorwe oppressed so Tr 5.177

Hire thoughte hire sorwful herte brast a-two  
For whan she gan hire fader fer espie  
Wel neigh down of hire hors she gan to sye. Tr 5.180-82

彼との思い出は過去のこととして背景化する。他方、ギリシャ側のディオメーデとの新たな関係性は、(1)の第2連で、現在形で表される。

(7) But natheles she thonketh Diomede

Of al his travaile and his goode cheere,  
And that hym list his frendshipe hire to bede;  
And she accepteth it in good manere,  
And wol do fayn that is hym lief and dere,      Tr 5.183-87

現在形で描き出されるクリセイデのディオメーデへの反応は、捕虜交換と相まって、物語の大構造(macro-structure)<sup>8</sup>の重大な転換点に現れ、その分情報の際立ちは一層高められる。

口承的なパフォーマンスから見れば、語り手は人物の過去の経験を I-mode 的に聴衆と対話、また共有しようとし、現在形への移行が促進されて、その修辭的な効果はさほど感じられない。この情報の共有性は彼女の反応の一般性を後押しするように思える。他方、写本から見ると、書き言葉を読む行為で、D-mode 的に過去の事態を一步引いて客観視してもおり、現在形の使用はそれだけ修辭的なものと解される。

クリセイデのディオメーデへの反応は、人物の直接語法でなく、何故語り手が介入して再現されたのか。その再現は五感に依拠するのか、言語なのかを含み、微妙なグラデーションがある。彼女のディオメーデへの言葉と言うよりは表情あるいはジェスチャーを語り手は言語化したのか(NRA)。それとも語り手は彼女の感謝の言葉を要約的に再現(NRSA)したのか。この要約に過去形でなく現在形を使用したのは、彼女のポライトネスの習慣的・一般的特性を際立てたと思える。しかし、4.1で指摘したように、礼節を越えた積極性の含みもあり、微妙な揺らぎは払拭できない。現在形の後、再度過去形(Tr 5.188-89)に戻るが、そこでは彼女の行為は背景化される。

最後に(1)の第3連は、また現在形で始められる。語り手は、クリセイデのディオメーデへのレスポンスから父親による彼女の歓迎へと方向転換する。

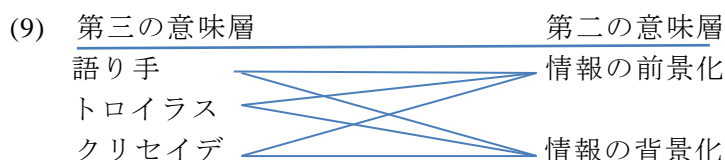
(8) Hire fader hath hire in his armes nome,      Tr 5.190

現在形は、いわば場面変更の際立ち(マーカー)でもある。

### 4.3. 第三の意味層「表現機能」(Expressive function)

第一の意味層「指示機能」、第二の意味層「テキスト機能」に、第三の意味層「表現機能」が加えられる。「表現機能」は、人物の経験に対する判断・評価の仕方、つまり、視点を問題にする。この第三の意味層では、視点の問題をより意識的に、丁寧に扱う。事態は、客観的にそのままにあるのではなく、主体を通して意義付けられ、最終的に言語に落とされていく。一般化であれ個別的であれ、主体の関与は否めない。間主観的(intersubjective)な傾向が増すと、それだけ一般的に、その傾向が弱いと、それだけ個性的(speaker's involvement)になる。視点の問題は、既に第一の意味層では相の選択(動作に完了点のあるほうが、ない方よりも主体の関与が際立つ)あるいは時制文かモーダル文かの選択(モーダル文には人物の内面、つまり心的状況が投影され易い)、第二の意味層では時制の切り替えと情報の価値付け(地の文においては、過去形は主体の関与が背景化し、現在形はそれが前景化する)を扱ってきた。第三の意味層(視点)と第二の意味層(情報価値)は、(9)のように関係し合う。





ここでは真実性の問題を改めて取り上げ、考察を広げてみたい。『トロイラスとクリセイデ』は、古代のトロイ・ギリシャ戦争を舞台に、トロイラスとクリセイデの愛の軌跡、その進展と破局を扱った口承ロマンスである。『トロイラスとクリセイデ』の戦場は、『ウオリックのガイ卿』(*Guy of Warwick*)の口承ロマンスのように広大に変転、広がる舞台ではなく、ギリシャ軍によって閉ざされたトロイの包囲(siege)の中、しかもその大半は狭いベッドルームである。登場人物の戦いは、ガイ卿のように武具をまとった戦いではなく、言葉をまとった戦い、葛藤である。ここでは、外面的・物理的な戦いを記述するのではなく、社会的理念と生身の人間の感情との戦いが掘り下げられている。

「経験」の叙述の問題は、「真実性とは何か」に密接に関わる。一般的にコンテンツの権威が重視されると、誰が見て、言ったのかという個別性は第二義的な問題であった<sup>9</sup>。チョーサーの語りは基本口承的であったことを考慮すると、言語テキストの解釈について聴衆との共有が促される。しかし、人間の意識や心理を深く掘り下げていく、また写本という書き言葉(literacy)を読むことも無視できないチョーサーにとって、この「真実」観のようには割り切れない。彼にとっての「真実」とは、「権威」と「経験」のいずれか一方ではなく、むしろその両者が紡ぎ出す兼ね合いである。チョーサーの話法の微妙なグラデーションは、このまさに狭間から紡ぎ出されたものと言える<sup>10</sup>。

捕虜交換を介して、クリセイデはどのように心的変化するのか、場面の最大の転換点で、その分視点の問題は注目される。(1)で見たように、トロイラスと別れた悲しさは、直接話法(モノログ)で言えたにも拘わらず、間接的に過去形、語り手の地の文で叙述され、彼女の視点は現在から隔てられている。反面、ディオメーデへのクリセイデの反応は、過去形で表せたも拘わらず、現在形で、しかも語り手を介して再現されている。真実性に綾があり、話法の微妙なグラデーションが生み出される。しかし、クリセイデの視点の介入が漸増していることには注意すべきである。語り手のコントロールを施した間接的な話法は、4.1で見たように(thonketh → accepteth → wol do fayn ...)、徐々に彼女の積極的な受け入れを浮かび上がらせている。モーダル文は人物の内面の動きを一層明確に捉え、このことから彼女のポライトネスはその許容範囲を超えているのではないかと疑わせる。結果、彼女の態度は一般的なのか、主観的なのか、揺らいでいく。「信頼する」(tristen Tr 5.188)と、彼女が更に積極に、かくして彼女の視点が一層露わになってくると、あたかもぼかすように過去形に戻される。しかし、モーダル文が維持され(wolde, myghte Tr 5.188)、視点の介入を示唆、続く“seyde she”(Tr 5.189)では、挿入的とは言え、クリセイデの視点は疑いのないものとなる。このことから遡及的に“thonketh”, “accepteth”を読みなすと、礼儀作法の解釈は一層揺らいでいくように思える。

#### 4.4. 第四の意味層「メタ言語的機能」(Metalinguistic function)

現在形を、第一の意味層「指示的機能」、第二の意味層「テキスト機能」、第三の意味層「表現機能」と見てきたが、第四の意味層「メタ言語的機能」が加わり、その厚みを更に広げていく。現在形の中核的意味は「時間の超越」である。この特徴を端的に投影するのが、語り手による聴衆・読者に向けたメタ談話(物語の中身の記述ではなく、物語の進め方についてコメント)と言語の使い方そのものについての注釈である。(10)のメタ談話から見ていこう。

- (10) But here I leve hire with hire fader dwelle,  
And forth I wol of Troilus yow telle. Tr 5.195-96

語り手は、これまではクリセイデについて語ってきて、ここで彼女を父親と一緒にしておいて、トロイラスについて語ることにしましょう、と方向転換する。最初は時制文（*And here I leve hire with hire fader dwelle*, Tr 5.195）、*leve* は活動動詞で完了点は不明、どこまでも続く。二番目はモーダル文（*wol ... telle*）。後者は語り手の意志と未来時の進行を写し出す。因みに、トロイラスの叙述は(11)のように展開する。

- (11) To Troie is come this woful Troilus,  
In sorwe aboven alle sorwes smerte,  
With feloun look and face dispitous.  
Tho sodeynly doun from his hors he sterte,  
And thorough his paleis, with a swollen herte,  
To chaumbre he wente; of nothyng took he hede,  
Ne non to hym dar speke a word for drede.

And ther his sorwes that he spared hadde  
He yaf an issue large, and “Deth!” he criede;  
And in his throwes frenetik and madde  
He corseth Jove, Appollo, and ek Cupide;  
He corseth Ceres, Bacus, and Cipride,  
His burthe, hymself, his fate, and ek nature  
And, save his lady, every creature.

To bedde he goth, and walwith ther and torneth  
In furie, as doth he Ixion in helle,  
And in this wise he neigh til day sojorneth.  
But tho bigan his herte a lite unswelle  
Thorough teris, which that gonnen up to welle,  
And pitously he cryde upon Criseyde,  
And to hymself right thus he spak, and seyde,

“Wher is myn owene lady, lief and deere?  
Wher is hire white brest? Wher is it, where?  
Wher ben hire armes and hire eyen cleere  
That yesternyght this tyme with me were?  
Now may I wepe allone many a teere,  
And graspe aboute I may, but in this place,  
Save a pilowe, I fynde naught t’enbrace. Tr 5.197-224

語り手は、最初の連を、現在形で始める。現在形は場面転換のマーカである。(1)の第3連で、クリセイデの父親が彼女を歓迎する時のように。トロイラスの悲しみの帰館に注意が向けられる。語り手はすぐに過去形に戻し、彼の悲痛な状態をまとめる。(11)の第2連では、トロイラスの直接話法（*Deth!* Tr 5.205）で際立て、次いで彼の神々への呪い（スピーチないし行為）を語り手が要約した話法 *NRSA/NRA* で、しかも現在形で前景化する（*He corseth Jove*,

Appollo, and ek Cupide; He corseth Ceres, Bacus, and Cipride, Tr 5.207-08)。(11)の第3連は、第1連同様に現在形で始まる。「ベッドに入ってもがき苦しむ」場面へと転換する(To bedde he goth, and walwith ther and torneth Tr 5.211)。そして過去形で彼の苦悶が語られ、最後の第4連では直接話法(モノログ)で彼のクリセイデへの想いが吐露される。「クリセイデはどこにいるのか、彼女の白い胸はどこにあるのか、枕の他には掴むものがない」(Tr 5.218-224)。しかし、このトロイラスの言葉はギリシャ陣営にいるクリセイデに届き、彼女の心を再度彼の方へとより戻すことができるのか。

次に言語そのものについての注釈を見ていこう。(12)はそのような典型例である。クリセイデがパンダラス邸での夕食の後、家に帰ろうとするが、突然の嵐で逗留を余儀無くされる。

(12) But O Fortune, executrice of wierdes,  
 O influences of thise hevenes hye!  
 Soth is, that under God ye ben oure hierdes,  
 Though to us bestes ben the causez wrie.  
 This mene I now: for she gan homward hye,  
 But execut was al bisyde hire leve  
 The goddes wil, for which she moste bleve.      Tr 3. 617-23

mene (Tr 5.621)は状態動詞で、完了点はない。現在形の「時間の超越」が生かされている。上述の表現が運命、神と形而上学的な説明であった。「こういうことを言いたいのだ」と注釈し、「彼女の許可を得ることもなく、神の意志が執行され、彼女は留まらざるを得なかった」(Tr 5.622-23)と。

現在形の定番はメタ談話と言語についてのコメントであるが、中世の語りにおいて、現在形の使用は、語り手の一般論なのか人物の個性を再現しているのか、しばしば客観と主観の境界線にある。4.3.で述べたように、中世では聖書の教えや賢人の言葉等、権威が重視され、誰が言ったのかは第二義的な問題にされた。また語りの口承的伝達においては、語り手と聴衆は、人物の過去の経験であれ、その価値を臨場的に共有し合う。その時 I-mode が起動し、現在形が好んで使われた。「時間の超越」を活かし、動作の一般性が強められる。価値の共有性・一般性は、この「メタ言語的機能」の本質から派生したものである。写本文化のリテラシーの厚みを考慮に入れると、読者は、語り手を介したこの一般化に説得されるのか、それともクリセイデは一般化を逆手にとって自分の主観を正当化しようとしている、と解するのか、容易には答えられない。

## 5. おわりに

チョーサーの話法の意味論を規定する上で、時制は不可欠な要素である。本論では、宮廷恋愛ロマンス『トロイラスとクリセイデ』を取り上げ、地の文の現在時制に着目した。語り手は主として人物の過去の経験を語っていくもので、過去形が無標である。にも拘わらず地の文において現在時制が散見される。どのようにまた何故使われるのか、(1)の用例を基に考察した。現在形は、直接話法では無標であるが、地の文では有標的に価値付けられる。現在形は、場面の転換点、つまり捕虜交換でトロイラスと別れたクリセイデが、ギリシャ側の騎士、ディオメーデの求愛にどのように反応するかをハイライトし、彼女の言動の微妙な曖昧性を描き出していた。

Fleischman (1990)は時制を語りの観点から見直し、意味の4層、「指示機能」、「テキスト機能」、「表現機能」、そして「メタ言語的機能」を規定した。本論ではこの4層に照らして、(1)の考察を行った<sup>11)</sup>。

第一の意味層「指示機能」では、動詞に凝縮する時制、相、モダリティを考察した。(1)で見たように、トロイラスと別れたクリセイデの悲しみは過去形(was=状態的相)で背景化、他方、ディオメーデの申し出への謝辞(ポライトネス)、積極的とも言える受け入れ態度(thonketh, accepteth=到達動詞、完了点あり)は、現在形で前景化された。時制文に対しモーダル文(wol do fayn)も使用され、人物の視点がより明確になった。現在時制の「時間の超越」を生かし、クリセイデの宮廷貴婦人としての礼儀作法なのか、それともそれを方略としてディオメーデを受け入れようとする個人の態度なのか、微妙な揺らぎが描き出された。しかし彼女の積極性が一層強くなると、モーダル文(wolde, myghte)は継承しつつも過去形で背景化、しかし語法はNRSA/NRAからより人物に近づけたISが採用された。伝達部 seyde sheで人物の視点が特定された。

第二の意味層「テキスト機能」では、第一の意味層「指示機能」に情報の目立ち度が加えられる。語りは人物の過去の経験を語ることから、過去形が無標、他方、現在形は有標である。本物語は基本口承的伝達であり、I-modeが活性化し、聴衆との距離が縮まり、現在形が使用され易い。同時に写本の書き言葉を読む行為として見ると、D-modeが活性化し、距離を置いて見る過去形も重要となり、それ故現在形への移行はその分目立つ。(1)で見たように、トロイラスとの関係はもはや過去のこととして背景化、ギリシャ陣営でのディオメーデとの関係は、現在形で前景化されている。トロイのトロイラスからギリシャ陣営のディオメーデへとという物語の最大の転換点で、情報の前景化は一層厚みを増していく。しかし、彼女の態度が一層積極的に推し進められると、過去形に戻され、背景化。但し、語法はISに転化し、話者が特定された。彼女を歓迎する父親の場面へと連が改められると、現在形で情報を前景化、現在形は場面転換のマーカースでもある。

第三の意味層「表現機能」は、第一の「指示機能」、第二の「テキスト機能」に加え、事象を捉える視点がより意識的、丁寧に問われる。中世の真実性は、権威的な内容がまず問われ、誰が言ったかは第二義的な問題であった。しかし 宮廷恋愛ロマンス『トロイラスとクリセイデ』はトロイラスとクリセイデの個人愛の追究で、彼らの心理や意識が深く掘り下げられ、一般論ではすまされない個別性がある。捕虜交換で彼女の視点はトロイラスからディオメーデへとシフトするのか。語り手の介入(NRSA/NRA)は、彼女のポライトネスを一般的なこととして客観化しているのか、それとも彼女の受け入れ態度はそれよりも積極的で、個別の視点が投影しているのか。語り手によるモーダル文の使用は一層人物の視点を炙り出していく。

第四の意味層「メタ言語的機能」は、基本的には物語の内容ではなく物語の進め方を語るメタ談話と言語の使い方そのものについてのコメントである。現在時制の中核的意味「時間の超越」が最も端的に機能している。この中核的意味は、(1)においては、クリセイデのポライトネスを聴衆・読者と価値を共有する、つまり、不変的なものと見なす上で効果的である。

以上のように、『トロイラスとクリセイデ』の地の文の現在形をFleischman (1990)の意味の4層を援用して分析した。本論は語法と時制の関係を解明するためのパイロットスタディである。チョーサーの文学伝承の方法は口承文化と写本文化の境界線上にあり、聴衆がオンライン上で即座に聞いて理解するのか、読者が目で反芻的に読み、テキストのリテラシーを広げ、深めていくのか、微妙な緊張関係が生じている。チョーサーの現在形はこの境界線において、一層の調査が求められる。今後はここでの考察を『トロイラスとクリセイデ』の他の現在形の用例にも当てはめ、更に密度の高い研究を目指したい。

注

1.Vendler (1967: 102-07)によれば、動詞の語彙相 (アスペクト) は次のように分類される(中尾が一部修正)。

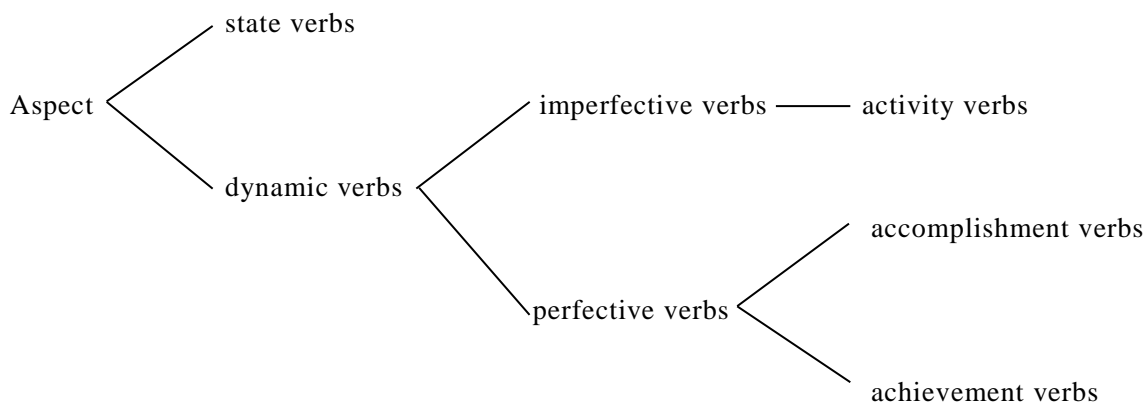


図 2 : 動詞の語彙相 (アスペクト)

e.g.: state verbs: have/desire/want something, like/love/like somebody, know/believe things, etc.

activity verbs: run, walk, swim, push, pull something, etc.

accomplishment verbs: paint a picture, make a chair, build a house, write a novel, deliver a sermon, etc.

achievement verbs: recognize/realize/spot/identify something, lose/find an object, reach the summit, win the race, cross the border, start/stop/resume something, be born, die, etc.

2. I-mode

中村[芳久](2004: .33-48)によれば、日本語は I-mode (Interactional mode of cognition)、英語は D-mode (Displaced mode of cognition)の認知プロセスを強く反映する。但し、両言語においてこのモードの切り替えがあることも指摘する。更に興味深いことに、英語の古英語から現代英語への発達、そして子供の言語の発達も、I-mode から D-mode へのシフトとして見なされるとも述べている。それぞれのモードは図 3、図 4 のように示される。

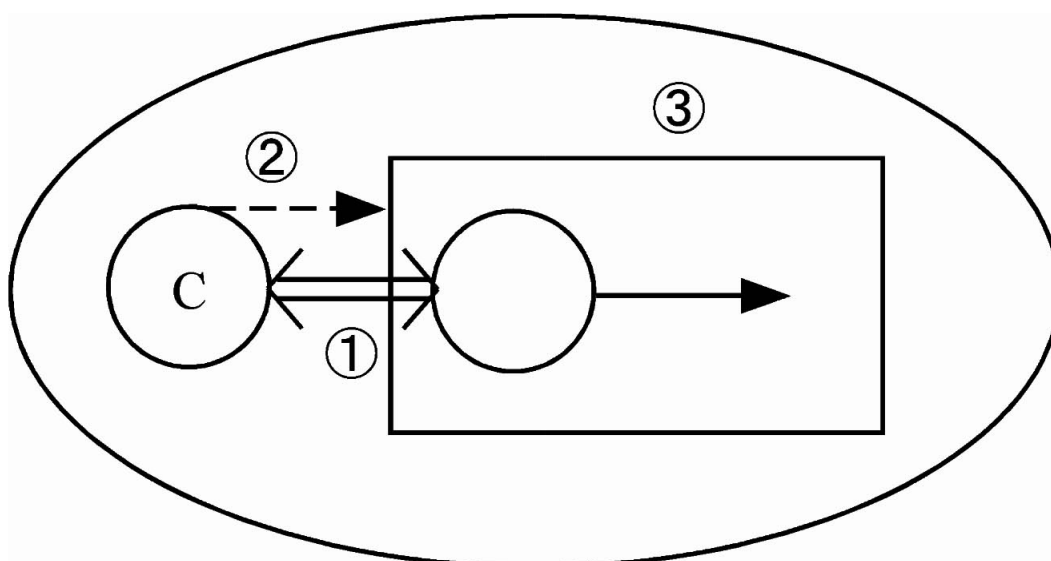


図 3 : I-mode (Interactional mode of cognition)

外側の楕円：認知の場 (domain of cognition, context, or environment )

C：認知主体(Conceptualizer)

- ① 両向きの二重矢印：インタラクション（例えば地球上のCと太陽の位置的インタラクション、四角の中の小円は対象としての太陽）
- ② 破線矢印：認知プロセス
- ③ 四角：認知プロセスによって捉えられる現象（例えば太陽の上昇）

### 3. D-mode

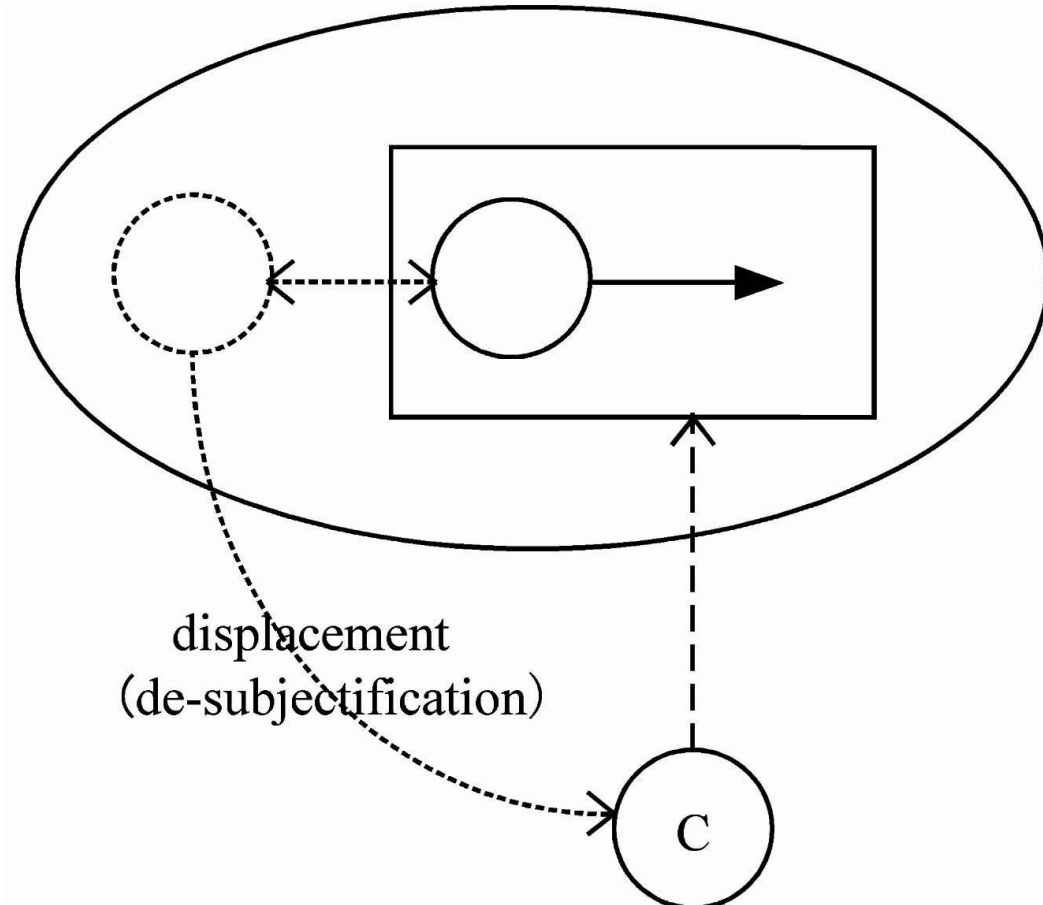


図4：D-mode (Displaced mode of cognition)

認知主体 C が脱主体化によって認知の場の外に出るため、①の認知主体と対象の直接的なインタラクションは存在しないかのようなのである。②の認知プロセスもあたかも客観的な観察の目のようである。③の見え（認知像）としての事態は、認知主体から独立して存在する客観のように見えることになる（「太陽の上昇」がそうであるように）。

中村(2004: 38)は、「環境によりよく適応するために、あるいは転じて環境をよりよく支配するために、人間という種はこのような認知操作を発達させたのではないか。」と言う。

I-mode と D-mode の言語現象での現れは表1の通りである。

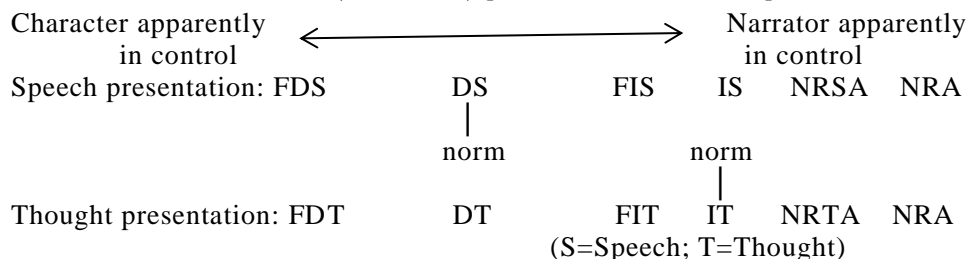
表 1 : I-mode と D-mode の言語現象での現れ (中村 2004: 41)

	I-mode	D-mode
a. 1 人称代名詞	多様	一定
b. 主観述語	あり	なし
c. 犠声語・擬態語	多い	少ない
d. 直接、間接話法	ほぼ直接話法のみ	間接話法も発達
e. 主体移動表現	通行可能経路のみ	通行不可能経路も可
f. 過去時物語中の現在時制	多い (e.g. 「る」形)	まれ
g. 間接受け身	あり	なし
h. 与格か 間接目的語か	与格 (利害の与格)	間接目的語 (受け手)
i. 題目か主語か	題目優先	主語優先
j. R/T か tr/lm か	R/T	tr/lm
k. 非人称構文	あり	なし
l. 代名詞省略	多い	まれ
m. 終わり志向性	なし	あり
n. アスペクト (進行形・ 「ている」)	始まり志向：始まり が基準点で、始まり の後	終わり志向：終わり が基準点で、終わり の前
o. 動詞 vs. 衛星砕付け	動詞砕付け	衛星砕付け
p. (英語の) 中間構文	直接経験表現	特性記述表現

注 : R=Reference point; T=Target; tr=trajector; lm=landmark

4. 真実性の問題は、Moore (2015)の指摘が参考になった。彼女は、中英語テキストの引用文 (quoting) の仕方について、人物の言葉を逐語的に再現することにこだわらなかった要因を、権威のある内容こそ大事で、話者の問題ではない、と指摘している。しかし『トロイラスとクリセイデ』はそう簡単には割り切れない。パンダラス (トロイラスの友人、クリセイデの叔父) はトロイラスとクリセイデの仲を取り持つため、金言を多用し、二人を動かしていく。但し、それは半面真理であり、次第に矛盾し、通用しなくなる。金言は、固定的ではなく、人物の視点が介入し、その価値は流動的である。詳細は、Nakao (2012:117-19)を参照。
5. 20 世紀初めのマンスフィールドやウルフのモダニストの文学では、自由間接話法(FIS)・自由間接思考(FIT)の多用で、地の文とスピーチの差異が曖昧化してきている。真実性は、生身の人間の意識や心理の動きを通して追究されている。人間の心理や意識のリアリティは根源的には同質であると言わんばかりである。モダニストは書き言葉の文学形態を経て再度口承化へ、つまり中世化してきているようにも思える。

6. 話法の分類：Fleischman (1990: 229) [After Short 1982: 184]を参照。



Examples:

DS/T (direct S/T): She said/thought, “I really like it here in Berkeley.”

IS/T (indirect S/T): she said/thought that she really liked it there in Berkeley.

FDS/T (free direct S/T): I really like it here in Berkeley.

FIS/T (free indirect S/T): She really liked it here in Berkeley.

NRS/TA (narrator’s report of an S/T act): She expressed/pondered her pleasure at being in Berkeley.

NRA (narrator’s report of an act): She liked Berkeley a lot.

図5：スピーチと思考の再現

7. Halliday and Hasan (1976: 29)の ‘Functional components of the semantic system’をベースにしている。言語機能を「概念構成的」(ideational)、「テクスト的」(textual)、そして「対人関係的」(interpersonal)に三分する。Fleischman (1990)の「テクスト機能」は Halliday and Hassan の「テクスト的」に対応する。そして「テクスト的」は次のように二分される。聞き手が既に知っている話し手が想定する情報が既知情報、他方、聞き手がまだ知らない話し手が想定する情報が新情報である。
8. 「大構造「は、起承転結のようなストーリーの展開の仕方に大きく関わる構造、段落と段落の関係、文と文の関係等、文を越えた範囲を問題にする。他方、文内の構造はマイクロ構造 (micro-structure) と呼ばれる。
9. 『トロイラスとクリセイデ』において、格言は誰もが共有する英知として導入されている。現在形はその不変性を表す。

For may no man fordon the lawe of kynde.

That this be soth, hath preved and doth yit ....

That was, and is, and yet men shall it see.      Tr 1.238-45

For ay the ner the fir, the hotter is -

This, trowe I, knoweth al this compaignye;      Tr 1.449-50

10. 事態を捉える主体の分化については、中尾(2018)及び Nakao (2018)で扱った。トロイラスの凱旋を見た時のクリセイデの反応 (Tr 2.631-37) は、語り手により間接的に過去形で書かれているが、微妙にクリセイデの視点が含まれており、自由間接話法・自由間接思考 (FIS/T) として捉えられる。また捕虜交換でギリシャ陣営に送られたクリセイデの帰りを今か今かと待つトロイラスとパンダラスの反応 (Tr 5.1156-62) は、誰かが帰ってきているのを目にして、二分される。トロイラスには「クリセイデ」に見え、他方、パンダラスには単に「荷馬車」に見える。いずれも直接話法、現在形でハイライトされるが、主体の分裂が見られる。更に言えば、両者の見解は部分的に正しく、より上位の視点から (視点の転換装置“*I*” [テクスト上姿を隠した存在で、物語の全体を統治していると想定される視点]、更にはフィクショナルスペースを越えたリアリティスペースの作家[チャーサーはロンドンで税関長の経験もあった])、「商品」として再構築される。クリセイデは、バータ取引の「商品」であり、荷馬車の上に乗せられる存在でもある (メトニミー効果)。<権威>あるコンテンツが重視され、主体の分化がさして問題にならない場合は、主体を分化しておいて (フィクショナルスペースの人物、語り手、視点の転換装置“*I*”、及びリアリテ



ィスペースの作家)、その距離が狭まり、あるいは一体化する場合として位置付けられる。

11. 4つの意味層は、相互に関連し合い、循環的に機能している。それぞれを分けて考察し、叙述において重複せざるを得なかった。どのように叙述を分化し、統合するかは今後の課題である。

## 参考文献

- Benson, L.D. (ed.) 1987. *The Riverside Chaucer: Third edition based on The Works of Geoffrey Chaucer edited by F. N. Robinson*. Boston: Houghton Mifflin Company.
- Fleischman, S. 1990. *Tense and Narrativity: From Medieval Performance to Modern Fiction*. Austin: University Texas Press.
- Fludernik, M. 1993. *The Fictions of Language and the Languages of Fiction: The linguistic representation of speech and consciousness*. London and New York: Routledge.
- Fludernik, M. 1996. *Towards a 'Natural' Narratology*. London and New York: Routledge.
- Halliday, M. A. K. and R. Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- Kerkhof, J. 1982. *Studies in the Language of Geoffrey Chaucer*. Leiden: E. J. Brill/Leiden University Press.
- 吉良文孝. 2018. 『ことばを彩る1 テンス・アスペクト』 研究社.
- Kurath, H., S. M. Kuhn & R. E. Lewis (eds.) 1952-2001. *Middle English Dictionary*. Ann Arbor: The University of Michigan Press
- Leech, G. and M. Short. 1981. *Style in Fiction*. London: Longman.
- Moore, C. 2015. *Quoting Speech in Early English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 中村芳久. 2004. 「第1章 主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」『認知文法論 II』大修館書店, 3-51.
- Nakao, Yoshiyuki. 1993. “The Ambiguity of the Phrase *As She That* in Chaucer's *Troilus and Criseyde*”, *The Japan Society for Medieval English Studies* No. 8, 69-86.
- Nakao, Yoshiyuki. 1995. “A Semantic Note on the Middle English Phrase *As He/She That*”. *NOWELE (North West European Language Evolution)* 25. Odense University Press, 25-48.
- Nakao, Yoshiyuki. 2012. *The Structure of Chaucer's Ambiguity*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- 中尾佳行. 2018. 「チョーサーの話法の意味論—『トロイラスとクリセイデ』における話法が多次元構造—」福山大学大学教育センター『大学教育論叢』第4号、16-36.
- Nakao, Yoshiyuki. 2018. “The Semantics of Chaucer's speech/thought presentation in *Troilus and Criseyde*: The emergence of conceptual blending”. Hideshi Ohno, Kazuho Mizuno, and Osamu Imahayashi, eds. *The Pleasure of English Language and Literature: A Festschrift for Akiyuki Jimura*. Hioroshima: Keisuisha, 241-60.
- Nakayasu, Minako. 2013. “Chaucer's Historical Present: A Discourse-Pragmatic Perspective”, Liliana Sikoruska/Marcin Krygier eds. *Evur happpie & glorious, ffor I hafe at will grete riches*. Frankfurt am Main: Perter Lang, 41-60.
- Short, M. 1982. “Stylistics and the Teaching of Literature with an Example from James Joyce's Portrait of the Artist as a Young Man”. In Ronald Carter (ed.), *Language and Literature*, 179-82. London: George Allen and Unwin.
- Simpson, J. A. & E. S. C. Weiner (eds.). 1989. *The Oxford English Dictionary*. 2nd edition. Oxford: Clarendon Press, 1989.
- Vendler, Z. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Zupitza, J. ed. 1883, 1887, 1891. *The Romance of Guy of Warwick: Auchinleck and Caius MSS*. EETS (E.S.) 42 (1883), 49 (1887), 50 (1891).